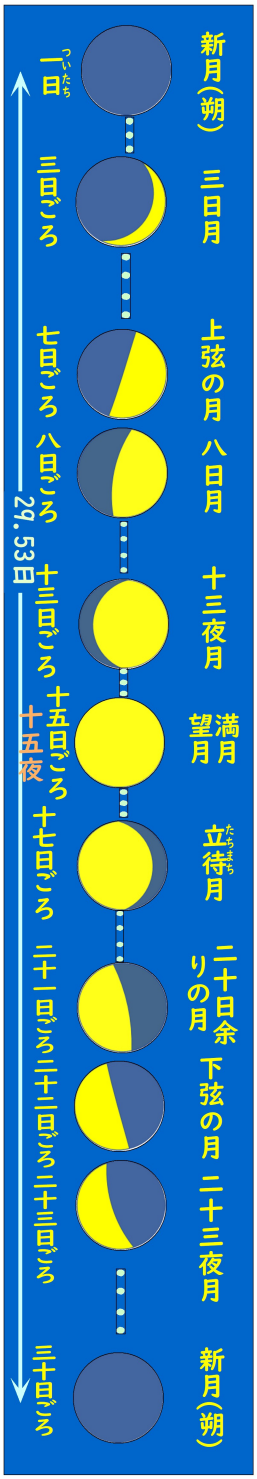
太陽を基準として暦をとる（月日を決める）のが太陽暦で、月を基準として暦をとるのが太陰暦だとわかりましたね。余談ですが、イスラム系の国の国旗に使われている図案といえば、☽（三日月）です。ここから月というものに重きをおいていたことが、わかるでしょう。一般的な太陰暦では、新月（朔）が月の始まりとなるのですが、イスラム圏の場合は三日月の日が月のはじめとなる一日（ついたち）にしていたそうです。ともあれ、月を基準とする陰暦をつかっているところもあったのです。わが国も太陰太陽暦を明治に入るまで使っていたのですから。

続いて月のお話です。

月（お月様）

月の満ちかけの周期を朔望（さくぼう）周期といい約２９．５３日です。地球から見て月の方位が太陽と重なり見えない月が新月です。当然ですが、日食がおこるのもこの新月の時です。新月の時、つまり月と太陽とが同じ方位になった地点を朔（さく）といい、月のはじまりである一日（ついたち）があてられます。徐々に膨らみ、だいたい１５日後に満月となります。この満月の状態を望（ぼう）または望月（もちづき）といいます。



月（月の始まりとひと月）

そろそろ気付いてきたでしょう。旧暦では月の満ちかけ（朔望）で、暦をとっていたのです。「月（何月）」の始まりは「朔」を迎えた時で、次の「月」は、また「朔」を迎えた時となるわけです。そして、ひと月の長さ（日数）は２９日か３０日となるわけです。現在のように３１日ある月はなかったわけです。

では、この朔を迎えた月は何月かをどうやって決めていたのでしょうか。ここで先ほどふれた「二十四節気」が登場します。「節」は季節を分けるもの、「気」は月の名前を決めるものと言われ、何月であるかは、「気」によるということになります。

朔望周期（ひと月）の中に存在する「気（中気）」が何月であるかを決めるのです。朔を迎えたある月が次の朔を迎える間に存在する中気が「雨水」だった場合、その月は「一月」となります。「春分」の場合には「二月」、「穀雨」の時は「三月」です。

閏月（閏（うるう）年ならぬ閏月？）

１年間365日の中に二十四節気の中気は12回あるわけですから、365／12≒30.4。30.4日に１回中気が存在することになります。月の満ちかけの朔望周期は約29.5日。ということは、ひと月（1朔望月）の中に中気が存在しないことがあるわけです。旧暦では、月の名前を決める中気が存在しない月を閏月（うるうづき）としたのです。一つ前の中気「夏至」が存在した「五月」のあとの、中気が存在しない月の場合「閏五月」としたのです。この閏月は19年のあいだに7回（3年弱に1回）加えることでほぼ誤差なく暦を運用できたということです。つまり、昔は１年が13ケ月あった年もあったのです。

一年（約365.2422日）を12で割ると30.43685。月の朔望周期は約29.530 589日。月の朔望を12回繰り返しても約354.3671日、１年365.2422日から見れば、11日ほど短くなってしまうのですから、季節との兼ね合いを維持するために設けられたのでしょう。これが、太陰太陽暦（旧暦）といわれるものなのです。

【こぼれ話】

六曜というのを知っていますか。「先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口（しゃっこう）」という六つあるあれです。「結婚式は大安がよい」「葬式は友引を避ける」など縁起を担ぐことで現在でも用いられています。この六曜も旧暦と関わりがあります。どの日にどの六曜を割り当てるか法則があるのです。

先勝→友引→先負→仏滅→大安→赤口（しゃっこう）の順で割り当てられるのですが、月名（旧暦の何月であるか）によって、はじまる六曜がずれていきます。

月名（旧暦）	一日（ついたち）の割当
1月・7月	先勝～
2月・8月	友引～
3月・9月	先負～
4月・10月	仏滅～
5月・11月	大安～
6月・12月	赤口～

旧暦の１月１日は「先勝」、１月２日は「友引」、１月３日は「先負」となります。朔を迎え月が変わり、２月になると、今度は２月１日は「友引」、２月２日は「先負」となります。右表のように割り当てられるのです。

カレーダーを見ると、旧暦の月日は記されてなくても、六曜は載っていることはありますよね。六曜の仕組みを知っていれば、今日が旧暦でいうと何月の何日かを導き出すことができます。まぁ、何の役にもたたないでしょうが、古人が月を見て想い描いた情感と産み出した学問の熱を感じとってくれれば幸いです。

自然を感じ、季節を感じ、情緒を感じ、法則性を感じ、生活と密着しながら、なんとか整合性のあるものへと創り上げた暦のドラマ、そのロマンを我々も生活の中でときおり振り返って感じてみるべきなのでしょう。